

「白い小鳥」

美しい森がありました。無憂(アソカ)の木はオレンジ色の花をいっせいに開き、闊浮(ジャンブ)の木のまだ固いつぼみが細長い葉かげにみえかくれしていました。どちらも高い木でしたが、ひとときわ高くそびえ、広い木かげを作っていたのは菩提樹(ぼだいじゆ)でした。木々の下で子どもたちが遊んでいました。手の届くあたりに、ジャスミンの白い花が良い香りを放っていました。少女たちはジャスミンをつんで髪にさしたり、一つ一つ香りを楽しんで花輪作りに熱中していました。

子どもたちはだれも、手を休め、足を止めてその声に耳をすましました。澄んでよくとおる珍しいさえずりでした。ひとりの少年が声の方へかけていきました。少年は菩提樹が続くあたりをふりあおいでいました。「何の鳥かしら」と、だれもおぼろに思いながら、美しいさえずりに耳をそばだてていました。その声がピタリと止まりました。少女たちがいっせいにふり向くと、少年たちが、木の下のしげみをかきわけていました。「どうしたのかしら」不審(ふしん)におもった少女たいが花輪をおいて立ちあがったときでした。「見つけたよ」少年が真っ白いものを、両手でそつと持ってこちらへかけてきます。その後から、大声でどなりながら追ってくる少年がいます。

「待てー、泥棒。それはぼくののだぞー」少年が持っていたのは白い小鳥でした。翼を傷つけられて、そこに赤い血がにじんでいました。追いついた少年が、肩で息をしながらいいました。「それ、ぼくのだよ。返しよ」いわれた少年は、体を固くして背を向けました。「返せよ、返せたら」力づくで取り戻そうとする少年に、年かきの少女がいました。「待って、わけを話してちょうだい」少年は口をとがらせて、後から来た仲間の少年たちいいました。「なあ、みんな、この鳥はぼくのだよな。ぼくが石を投げて落とすんだから」「そうだ、そうだ」とさわめく声の中に、「ちがうよ」というはっきりした声がありました。

「見つけたほうのものだよ。だってあんなにわかりにくい所にいたんだからね。そうだろう」「そうだな、ぼくたちみんな、ずいぶん探したもんかな」白い小鳥は打ち落とした方か、見つけた方か、どちらのものなのか、少年たちは声をはりあげていい争いました。「早くしないと、この鳥、死んでしまうよ」今までじつとだまって小鳥をだいていた少年が必死で叫びました。「あ、静まった子どもたちでしたが、また激しくいっつのがりました。「あのね、ちよつと待って」ジャスミンを髪にさした少女が、森の中へ走ってゆきました。やがて少女は老人の手を引いて戻ってきました。老人の瞳(ひとみ)は、小さな窓のようにそこだけあいて、

あとは白い長い髪と、髭(ひげ)とおおわられていました。「話は聞いたよ、おじいさんの話を聞いてくれるかね」子どもたちは老人の優しい瞳とおごそかな声の調子に、黙ってうなずきました。「生きものの命はだれのものか。それは命を傷つけようとする人のもではない。命を育(はぐく)もう、いたわろうとする人のもものだよ」子どもたちの瞳はいつの間にか、老人のそれと同じになっていました。(本生経(ジャータカ))



わたしもさんわで建てました

日出店

杵築市山香町野原 糸永 福巳 様



私たち夫婦も年を重ねるにあたり、以前から墓地にあるお墓をまよめたいと、計画はしておりました。昨年春、母親が亡くなりお墓を立てる時期を思案しておりました。3年ほど前からお墓の営業でみえてたさんわ

の小城さんとの雑談で、「二度展示場のお墓を」覧になられませんか?」とのこと。12月に展示場に伺うことになり、建立に至りました。墓地が広く、将来の管理面も考慮して、外柵付きで周囲も全面コンクリートを貼り、希望道理の配置となり大変満足しております。内容も、工事関係も、全面的にお任せでしたが、丁寧に仕上げてください。月初め無事に納骨式も終えました。春の法要の近づく中、これでやっと仏様の供養ができます。ありがとうございます。



森町店

大分市野津原 小野 千恵蔵 様 先祖代々の墓



一時(新しいお墓の出来るまで)、お骨の取り出し



解体、運び出し工事



新しいお墓



我が家の先祖墓は部落墓地にあり、墓は大きいし、敷地は広くて(写真参照)、歳は取って来るし、年々お守りが大変になってきてました。私の知り合いの隣りが墓屋さん(さんわ)でしたので、帆(さお)だけ残して(石が良かったのと先祖の念が残っている)納骨の部分だけやり変えてもらいました。幸い石の色もピッタリで大変いいものが出来たと喜んでいました。ありがとうございます。